関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集 22 号　2012

日本語教科書における複文のテンスの扱い

大川　英明

要旨

本稿では日本語の複文における主節と従属節の時の関係について考察し、その関係を規定する要素を提案することにより特に中・上級の日本語を担当する教師が理解しておくべき要素を明らかにする。まず、日本語教科書における名詞修飾節と「とき」節における時の関係を日本語教科書がどのように扱っているかを分析し、そこで扱われている時の関係を明らかにする。それに基づいて、そこでは考慮されていない時の関係を指摘し、複文における時の関係の全体像を洗い出す。さらに、具体例を示し、複文における主節と従属節の時の間に実際に許される時の関係は従属節のテンス選択特性、従属節の特性、文の内容、等により決まってくることを主張する。日本語教科書には複文における時の関係の詳細な説明はないので、教師が特に中・上級を担当する場合には生教材に含まれる様々な複文における時の関係を扱う場合にこのような知識は役に立つであろう。

【キーワード】テンス、時の解釈、従属節、複文、日本語教科書

1. はじめに

本稿では日本語教科書が複文におけるテンスと時の解釈の問題をどのように扱っているかを分析し、その結果に基づき、日本語教師としてどのような対応をすべきかを提案する。

まず、基本的な概念の確認をしておきたい。テンスとは時の解釈に関わる言語形式のことであるが、日本語のテンスとしての文法形式にはいわゆる非過去形（ル形）と過去形（タ形）の 2 種類がある。これに対して時の解釈は通例、過去時、現在時、未来時の 3 種類を設定する(1)。本稿ではこれに従い、議論を進める。この 2 種類のテンス形式は具体的な述語や時の副詞など､他の要素により 3 種類の時の指定がなされる。これを具体例により示すと次のようになる。

(1)a. （昨日）映画を見た。

b. （明日）映画を見る。

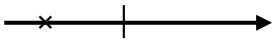
c. （この部屋に）部長がいる。

d. 明日は部長がいる。（今日は来ていないが、明日はここにいるという状況）

e. （ああ）忙しい。

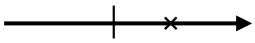
f. 明日は忙しいぞ。

(1a)では述語に活動を表す動詞が含まれ、過去形のテンス形式を持つ。図式で表すと次のようになる。

(2)a. 

見る　ST（=speech time（発話時））

「見る」という活動が発話時から見て、過去に起こったことを表す。これに対して (2b)は同じ動詞が含まれているが、非過去形になっており、未来時を表す。

(2)b. 

ST　見る

動詞が非過去形であっても動詞の種類が異なると別の時点を表すことになる。例として様態動詞がある。 (1c)のような状態動詞を含む文は通例、(2c)のように現在時を表すが、(1d)のように未来時を表す表現がある場合は未来時（状態）も表すことができる。

(2)c.

ST = いる

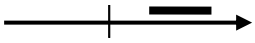
(2)d.

ST　いる

(1c, d)と同じように述語が本質的に状態を表す形容詞や形容動詞の場合も発話時（ = (2e)）と未来時（ = (2f)）を示すことができる。

(2)e.

ST = 忙しい

(2)f. 

ST　忙しい

このような基本的なテンスと時の解釈は日本語学習者にとって比較的理解しやすい学習項目であるが、複数の述語を含む複文となると、主節と従属節のテンスが増え、複数のテンス間の関係に複雑な様相を呈してくる。以下では従属節のうち、名詞修飾

節と「（節）とき」の構文に絞り、日本語教科書におけるテンスと時の問題がどのように扱かわれているかを分析する。更にそれに基づいて複文における時の解釈の全体像をまとめ、教師が複文のテンスを扱う時に注意すべき点を提案する。

2. 日本語教科書におけるテンスの扱い

2.1 名詞修飾節

教科書によっては学習する表現や文法項目の説明がほとんどない場合もある。また、少ない場合がある。このような場合には当然教室での教師の説明や練習でそれを補うことになる。教師の役割がより大きくなる。大学レベルで使用される教科書ではある程度の説明が加えられるのが通例であるが、実際それぞれの表現や文法・文型に対する説明は一定ではない。まず、名詞修飾節に関して具体的にどのような説明がなさているかを分析してみると、次のような項目が取り上げられていることがわかる。

(3) 名詞修飾節のための説明事項[(2)]

a. 形容詞、形容動詞などと同様、文（節）にも名詞修飾機能がある。

b. 名詞修飾節は被修飾名詞の前に置かれる。

c. 従属節も主節と同様、非過去形（ル形）と過去形（タ形）が可能である。

d. 従属節の述語は普通体を使う。

e. 従属節も肯定形と否定形がありうる。

f. 従属節の主語は助詞の「が」で表される。

g. 英語のような関係詞（*which, that, who, where* など）を使わず、述語で終わる節をそのまま名詞の前に置く。

h. 節（文）に修飾された名詞は文内で普通の名詞と同じ位置に現れ、名詞と同じ様々な文の要素になる。

教科書によりほとんど説明を入れないタイプの教科書もある一方、上記項目のいくつかを含む説明を施しているものもある

これらの項目のうち、本稿に直接関連するのは(3c)である。述語のテンスの形式に関する指摘は多くの教科書でなされているが、次のような簡単な指摘にとどまっている。

(4) 名詞修飾節におけるテンス形式の説明

Since the modifier is a sentence, it can take the plain non-past or plain past form in either the affirmative or negative. (*Japanese for College Students*, p.118)

（修飾要素は文であるので、肯定形であれ、否定形であれ、普通体の非過去形や過去形を取ることができる。）

他の教科書もほぼ同等の説明をするか、説明を加えず、例文により暗示している。しかしながら、いずれの教科書も主節と従属節のテンスと時の関係に対する説明はないと言ってよい。

主節と従属節のテンスの組み合わせを考えてみると、次のような 4 通りあることになる。

(5) 主節と従属節のテンスの組み合わせ　（る＝非過去形、た＝過去形）

a. る（従属節）－る（主節）

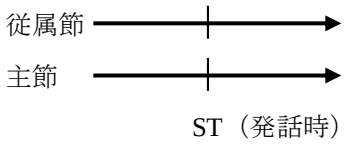
b. た（従属節）－る（主節）

c. る（従属節）－た（主節）

d. た（従属節）－た（主節）

このようにテンスの組み合わせは 4 通りであるが、時の解釈はそれ以上になる。つまり、従属節が表す時点と主節が表す時点の前後関係とともに発話時との関係により具体的な文における時の解釈がなされることになるが、時の解釈は主節と従属節それぞれに 3 通り（過去時、発話時、未来時）あり、理論的には従属節と主節との時の関係を考えることになる。

(6) 主節と従属節のテンスの組み合わせ



組み合わせの可能性は(5)よりは多くなるが、詳細の分析は次節で扱う「とき」節のあとに行う。

2.2 「～とき」節

「とき」節の「とき」は英語の *when* を意味するという簡単な説明をする教科書もあるが、「とき」節は名詞修飾節とは異なり、時の解釈に関する説明が多く見られる。まず、日本語教科書に含まれる時の解釈以外の基本項目をまとめておく。

(7) 日本語教科書における「とき」節のための説明事項

a. 「とき」節の述語は非過去形・過去形が可能である。

b. 「とき」節の述語は肯定形・否定形が可能である。

c. 「とき」節の述語は普通体を使う。

d. 「とき」節の述語は繋辞、形容詞、形容動詞、動詞で「とき」の前に置く。(「節＋とき」という順番)

e. 「とき」節は全体として副詞としての機能を持つ。

f. 「とき」節の主語には「が」が使われる。

g. 「とき」の直後に助詞「に」を置くことができる。

この他にテンスと時の解釈についての説明も次に示すように、多くの教科書で見られる。

(8) 「とき」節のテンスに関する説明

a1. 主節の時を基準に従属節の状況がそれよりも以前ならば(＝完了していれば)、過去形を使い、以後ならば（＝未完了ならば）非過去形を使う。

a2. 従属節が非過去ならば､主節の時に行為や状態が完了していないことを表す。従属節が過去ならば、主節の時に行為や状態が完了していることを示す。(*Japanese for College Students*, p.53)

b. 文全体のテンスは主節の動詞の形により決まる。

c. 主節のテンスは発話時をもとに解釈される。(*Japanese for College Students*, p.53)

d. 可能な組み合わせ (*Japanese for College Students*, p.53)

S_1 [・・・V_1-る] -とき、S_2[・・・V_2-ます]。($S_1 = S_2$,　$S_1 \leftarrow S_2$)

S_1 [・・・V_1-た] -とき、S_2 [・・・V_2-ます]。($S_1 \rightarrow S_2$)

S_1[・・・V_1-る] -とき、S_2 [・・・V_2-ました]。($S_1 = S_2$,　$S_1 \leftarrow S_2$)

S_1 [・・・V_1-た] -とき、S_2 [・・・V_2-ました]。($S_1 \rightarrow S_2$)

e. S_1 が状態述語である場合、常に非過去形を取る。この場合、S_1 は S_2 の時点における状態を表すので、主節と従属節の時間的な関係は S_1=S_2 であり、前後関係は表さない。 (*Japanese for College Students*, p.54)

(8a1)と(8a2)は表現の仕方が異なるだけで､実質的には同等の内容であると考えてよい。また、(8b)はこれと同一線上にある内容である。これらの説明のための典型的な例を挙げておく。

(9) 「とき」節のテンスに関する説明の例文

a. この辞書は日本へ行く時買いました。 (『中級の日本語』, p.127)

b. この辞書は日本へ行った時買いました。(『中級の日本語』, p.127)

(8c)は(8a-b)を述べたうえでの説明であるが、主節の時の解釈は単文と同じであることを確認するための説明であると思われる。

(10) (8d)の例文 (*Japanese for College Students*, p.54)

a. S_1[・・・V_1-る] -とき、S_2[・・・V_2-ます]。($S_1 = S_2$, $S_1 \leftarrow S_2$)

1) 来月北海道へ行くとき、船で行きます。 (S1=S2)

2) 出かけるとき、げんかんにかぎをかけてください。 (S1←S2)

b. S_1[・・・V_1-た] -とき、S_2[・・・V_2-ます]。($S_1 \rightarrow S_2$)

1) 駅に着いたとき、電話してください。[(3)] (S1→S2)

2) 来月北海道へ行ったとき、友だちに会います。 (S1→S2)

c. S_1[・・・V_1-る] -とき、S_2[・・・V_2-ました]。($S_1 = S_2$, $S_1 \leftarrow S_2$)

1) 北海道へ行くとき、船で行きました。 (S1=S2)

2) リーさんはねるとき、めざまし時計をかけました。 (S1←S2)

d. S_1[・・・V_1-た] -とき、S_2[・・・V_2-ました]。($S_1 \rightarrow S_2$)

1) 夏休みに国に帰ったとき、アルバイトをしました。 (S1→S2)

2) 北海道へ行ったとき、友だちに会いました。 (S1→S2)

(8e)は従属節が状態述語を持つケースである。例は次のとおりである。

(11) (8e)の例文 (*Japanese for College Students*, p.54)

a. いそがしいとき、テレビを見ませんでした。 (S1=S2)

b. 父が家にいるとき、いっしょにゲームをしたり野球をしたりします。[(4)] (S1=S2)

3. 日本語教科書における説明の分析

3.1 複文における時の関係の基本型

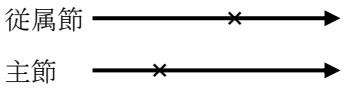
以上、名詞修飾節と「とき」節に絞り、日本語教科書におけるテンスと時の解釈に関わる説明をみてきた。この 2 種類の構文以外にも様々な複文構造があるが、従来の日本語教科書を概観すると、特に複文における時の解釈についての言及が多くないという傾向が認められる。

上で見た名詞修飾節に関しては(3e)のようにテンスの形についての説明はあるが、時の解釈まで説明してある教科書はほとんどない。これに対して、「とき」節は多くの教科書で程度の違いはあれ、何らかの時の解釈の説明がなされている。これらの教科書はほとんどが初級の教科書であるが、基本的に(8)にまとめたような説明になって

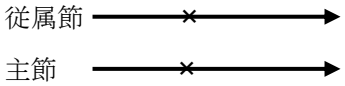
いる。初級という学習者のレベルを考慮するならば、このような説明で十分であり、理解しやすい説明となっている。初級用の説明としては妥当であると思われるが、それ以上のレベルや生教材を読む時には説明しきれない文もあり、また言語学的には更なる説明が必要になってくる。その現象は特に中・上級のレベルを担当する教師は知っておくべきであると思われる。以下、主節と従属節の時の間を総括的に把握し、議論を展開する。

(8a1-2)は言語学的には相対テンス理論に基づく解釈である。つまり、従属節の時の解釈は主節の時点を基準にして、従属節が非過去形を持つならば、主節の時点と同時か以降を表し、過去形を持つならば、主節の時点よりも以前を表すという考え方である。図で示すと次のようになる。

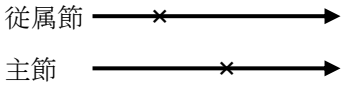
(12)a. 従属節＝非過去形（＝従属節未完了）



b. 従属節＝非過去形（同時）



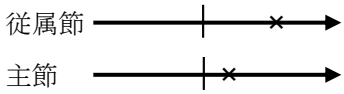
c. 従属節＝過去形（＝従属節完了）



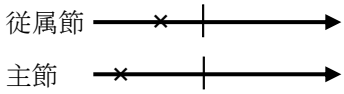
この分析の仕方は具体的な時の解釈には関与しないことになるが、それを含め、より精緻な分析をするならば、更に体系的な分析が必要となる。つまり、主節と従属節の時の関係を発話時を含めた時間軸上で記述する必要があることになる。本稿では論点をわかりやすくするために、従属節に動詞を含む文のみを扱うことにする。従属節が形容詞、形容動詞、名詞+繋辞の要素を持つ構造、遂行文（「ここに大会の開始を宣言する」のような文）における動詞や「あっ、こんなところに財布があった」のようなモダリティーを表すテンスは除外して議論する。

アスペクト理論を踏襲しつつ、(12)の分析に発話時を軸とした時の解釈を加えて主節と従属節の時の関係を考えてみると、可能性としては次のような組み合わせがありうる。

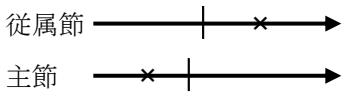
(13)a. 従属節＝非過去形（＝従属節未完了）



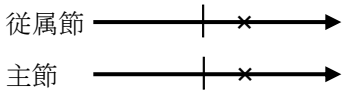
b. 従属節＝非過去形（＝従属節未完了）



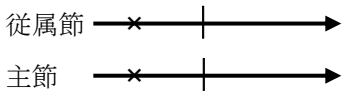
c. 従属節＝非過去形（＝従属節未完了）



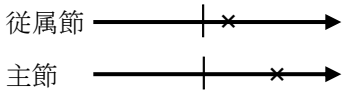
d. 従属節＝非過去形（同時）



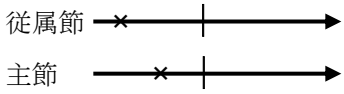
e. 従属節＝非過去形（同時）



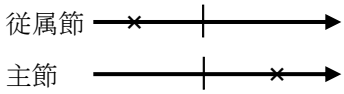
f. 従属節＝過去形（＝従属節完了）



g. 従属節＝過去形（＝従属節完了）



h. 従属節＝過去形（＝従属節完了）



(13a) - (13c)は全て従属節が非過去形であり、従属節の時点が主節の時点よりも先になっている。(13a)と(13b)には次のような例があった。

(14)a. 出かけるとき、げんかんにかぎをかけてください。(= (10a2))

b. リーさんはねるとき、めざまし時計をかけました。 (= (10c2))

(13c)の具体例も存在する。この場合、従属節が非過去形で、主節が過去形である。しかしながら、日本語教科書ではこの例はテンスの説明では取り上げられていない。

(14)c. 明日来る人に電話した。

(13d, e)は同時の例である。従属節が非過去形であるが、主節は非過去形、過去形の両方が可能である。

(14)d. 来月北海道へ行くとき、船で行きます。 (= (10a1))

e. 北海道へ行くとき、船で行きました。 (= (10c1))

(13f, g)は両方とも従属節に過去形を含む例である。この場合も主節は非過去形と過去形が可能である。

(14)f. 駅に着いたとき、電話してください。 (= (10b1))

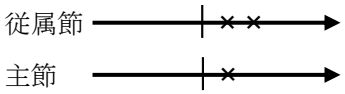
g. 夏休みに国に帰ったとき、アルバイトをしました。 (= (10d1))

(13h)は従属節が過去形で主節が非過去形である。これは日本語教科書ではあまり言及がない組み合わせであるが、次のように例文は存在する。

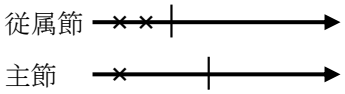
(14)h. 昨日買った本を明日返品する。

日本語教科書で扱っている従属節における時の組み合わせをテンスの組み合わせをまとめて図で示すと次のようになる。

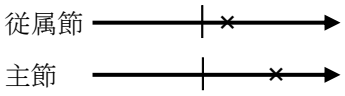
(15)a. S_1 = 非過去形、S_2 = 非過去形 （S_1 = 従属節、S_2 =主節）((10a)の組み合わせ)



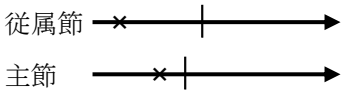
b. S_1 = 非過去形、S_2 = 過去形 ((10c)の組み合わせ)



c. S_1 = 過去形、S_2 = 非過去形 ((10b)の組み合わせ)



d. S_1 = 過去形、S_2 = 過去形 （ (10d)の組み合わせ)



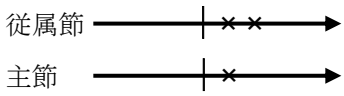
特に初級の日本語教科書による文法・構文説明は相対テンス理論、もしくはアスペクト的な解釈の仕方に基づいていると言える。初級というレベルの学習者にとっては比較的わかりやすい説明であり、これ以上の詳細を説明すると、量と質の面で学習の困難さが増してしまうので、このアプローチは適切であろう。しかしながら、中級や上級で扱う教科書や生教材の中には(14c)（= (13c)の状況）や(14h)（= (13h)の状況）のような文や以下で紹介するような文も存在するので、それに備えるために少なくとも教

師が複文におけるテンスと時の解釈に関する現象を理解しておく必要があるだろう。

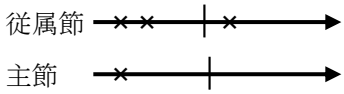
3.2 複文のテンスのパターンの詳細

日本語教科書で扱われているテンスと時の関係に(14c)と(14h)の情報を加えると、(15b)と(15c)はそれぞれ、(16b)と(16c)のように拡張することができる。比較しやすくするために(15a)(15d)も再録しておく。

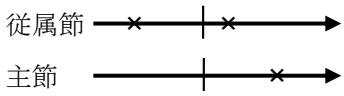
(16)a. S_1 = 非過去形、S_2 = 非過去形　（再録 = (15a)）



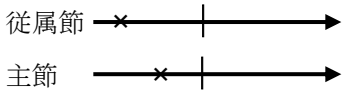
b. S_1 = 非過去形、S_2 = 過去形　（(15b)に(14c)を加えた時の関係）



c. S_1 = 過去形、S_2 = 非過去形　（(15c)に(14h)を加えた時の関係）



d. S_1 = 過去形、S_2 = 過去形　（再録 = (15d)）



この図は今まで取り上げてきた例文における時の関係をカバーしており、これを見ると、更なる分析がしやすくなる。主節と従属節のテンスが異なる場合の状況は上記(16b)と(16c)で捕捉できていると思われるが、更に複文における主節と従属節の時の関係を表す現法を分析すると、(16a)と(16d)に関してはもう少し可能な組み合わせがあることがわかる。(16a)で認められる組み合わせに加えて、次のような例が存在する。

(17)a. 来週買う車を来年には売る。

b. 次に選ばれる市長に市の再建を任せる。

この二文は主節と従属節ともに非過去形であり、(17a)の従属節の「買う」が示す時点は未来時ではあるが、主節の「売る」の時点よりも以前の行為である。同様に(17b)の「選ばれる」が示す時点は主節の「任せる」の時点よりも以前であると解釈される。(16a)には含まれていない新たな時の状況を示している。

(16d)は二つのテンスが過去形になっている。この場合、日本語教科書では従属節で表される時点が主節の時点の以前であるという解釈のみ挙げられているが、次の例の

ようにこの他の組み合わせも存在する。つまり、従属節の時点が主節の時点よりも先になる場合と同時である組み合わせを加えることになる。

(18)a. 太郎はレースで勝った馬をみごと予想した。

b. 北海道に行ったとき、初めて飛行機に乗った。

(18a)では「勝つ」の時点は「予測する」行為以降になる。(18b)では(16d)のような従属節が主節よりも以前という解釈（北海道に行き、そこで飛行機に乗ったという解釈）もありうるが、同時の解釈も可能である。つまり、「北海道に行く」道中、「飛行機に乗った」という解釈も可能である。

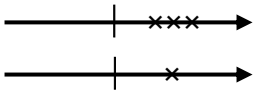
今(16a,d)に付け加えた時点の組み合わせを加え、まとめた図を示すと次のようになる。

(19) 複文における時の関係図

a. S_1 = 非過去形、S_2 = 非過去形

従属節

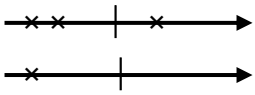
主節



b. S_1 = 非過去形、S_2 = 過去形

従属節

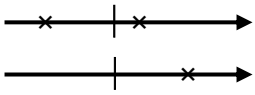
主節



c. S_1 = 過去形、S_2 = 非過去形

従属節

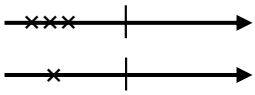
主節



d. S_1 = 過去形、S_2 = 過去形

従属節

主節



この表からいくつかのパターンを読み取ることができる。ここから導き出される複文の時間の解釈に関する特徴を次節で分析する。

3.3 複文テンスの分析

(19)において主節と従属節の時点の関係を見てきた。図を概観し、分析を進める。まず、(19a)と(19d)を比較すると、時の分布に「対称性」があることがわかる。発話時を軸に過去時と未来時において時点の分布が分かれている。(19a)は二つの非過去形を含む例であるが、全ての時は未来時であり、主節の時点に対する従属節の時の関係は

「以前」「同時」「以後」の 3 種類がある。また、(19d)は全ての時は過去時であり、主節の時点に対する従属節の時の関係は(19a)と同様に「以前」「同時」「以後」の 3 種類がある。発話時を軸に対称的に過去時と未来時に同等の時間分布が認められる。

次に日本語教科書の分析で示したように、教科書では相対テンスの考え方に基づく分析をしている。つまり、従属節が非過去形の場合は主節の時点と同時か以降の時間的関係を示し、過去形ならば、完了を表すので主節の時点よりも以前になるという考え方であるが、少なくとも(19a)と(19d)を見る限り、この考え方では捕捉しきれない。(19a)では非過去形にもかかわらず、従属節の時点が主節の時点の以前になっている。また、(19d)では主節と従属節に過去形が含まれる構造であるが、従属節が過去形であるので、その時点は主節の時点以降になることもないし、同時の解釈もないことになるが、実際にはその両方が可能である。(19a)と(19d)の現象から導き出されることは主節と従属節のテンスが同じ場合、主節が非過去形ならば、主節も従属節も未来時を表し、両者の時間的関係は文の内容や従属節の種類など複数の要素により決まる。つまり、主節の時点を基準に従属節の時点が以前、同時、以降の 3 通り可能になる。また、同様に主節が過去形ならば、主節も従属節も過去時を表し、両者の時間的関係は主節の時点を基準に従属節の時点が以前、同時、以降の 3 通り可能になるということである。

日本語教科書で採用しているような相対テンスに基づく説明は特に初級の学習者には有効であるが、上で検証したように、言語学的にはその説明だけでは捕捉できない現象もあることを日本語教師は認識しておくべきである。

(19b)と(19c)は一見、相対テンスの様相を呈しているように思われるが、実際はそうではない。(19b)は従属節が非過去形であるので、相対テンス理論の通り、従属節の時点が同時か主節の時点以降になっているように見える。従属節の時点が主節以降であるが、(10c2)のように過去時に類推・解釈される場合は相対テンスであるが、(14c)のような場合は副詞的機能を持つ「明日」という表現からもわかるように、基準となる時が現在時になっており、そうすると絶対テンスであると考えられる。

(19c)は(19b)とは反対に、主節が過去形で従属節が非過去形である。これも(19b)と同様、相対テンス理論に合致するように見える。つまり、過去形を持つ従属節が表す時点が主節の時点より以前になっている。しかしながら、(10b1-2)のように従属節の時点が未来時である場合は相対テンス理論で説明できるが、(14h)のような例文のように、従属節の時点解釈は発話時を基準に行われるので、相対テンスではなくて、絶対

テンスの例になる。(19a)と(19d) の間に対称性が見られるが、(19b)と(19c)も同じように発話時を起点とした対称性が認められる。(19b)は従属節に非過去形を持つので、非過去形の特徴の一つである「同時」の組み合わせがある。

4. まとめ

(19)はテンスと時の組み合わせの最大値であるので、個々の構文における状況は異なる。本稿で全て複文構造の時の解釈について分析し、特徴を記述することはできないが、教師として最大値を認識していればどの組み合わせが可能かを分析しやすくなるであろう。

個々の構文によるテンスと時の組み合わせの違いは複数の要素により決まってくる。詳細の議論は別の機会に譲ることにするが、ここでは少なくとも３項目あることを主張しておく。

(20)a. 従属節のテンス選択特性

b. 従属節の特性

c. 文の内容

(20a)の「従属節のテンス選択特性」とは従属節により取ることができるテンスの制限がある。つまり、従属節により非過去形または過去形または両方を取ることができるかが決まっている。例えば、「～まえに」は非過去形のみ取るが、「～あと（に)」は過去形のみ可能である。また、本稿で取り上げた「～とき」節や名詞修飾節は二つのテンスを取ることができる。

(20b)の「従属性の特性」とは二つのテンスを取ることができる従属節でも、従属節の種類により主節と従属節との時の解釈の組み合わせが異なるということである。例えば、名詞修飾節や「～とき」節は組み合わせが多いが、「～ついでに」は組み合わせの数が少ない。さらに、二つの時の前後関係の解釈が困難な傾向を示す。例として主節と従属節ともに非過去形の文を示しておく。

(21) 名詞修飾節（主節＝非過去形、従属節＝非過去形）

a. 明日スーパーで買うものを書いておく。

b. 太郎は今度買う車も絶対にぶつけるよ。

c. 明日移動する車で寝る。

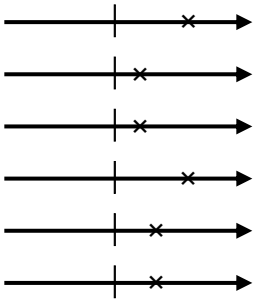
(22) 「～ついでに」（主節＝非過去形、従属節＝非過去形）

a. 銀行に行くついでにコンビニに行く。

名詞修飾節はここでは 3 種類の時間関係がある。(21a)では従属節の時点が主節の時点以降、(21b)では逆に従属節の時点が主節の時点よりも以前、(21c)の場合は同時である。関係図は次の通りである。

(23) 名詞修飾節（主節＝非過去形、従属節＝非過去形）

a. 従属節
主節
b. 従属節
主節
c. 従属節
主節



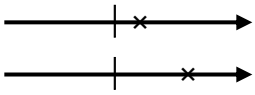
これに対して、(22a)の「～ついでに」の例文では内容として「コンビニに行く」が行動の主目的ではあるが、時の解釈としては「銀行に行く」と「コンビニに行く」の前後関係を特定することができない。

(20c)の「文の内容」により時の解釈の違いが生起する例は従属節を一定にした例文を考えればよい。次の例は全て「～とき」節を含み、主節と従属節ともに非過去形に統一されているが、(25)で示すようにそれぞれの文の時間関係は異なる。

(24) 名詞修飾節（主節＝非過去形、従属節＝非過去形）

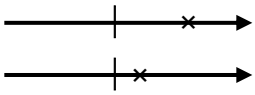
a. 今度会うときに、お金を返します。 (S1→S2)

従属節
主節



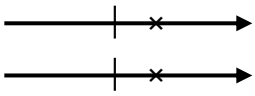
b. 海外旅行に行くとき、パスポートを取ります。 (S1←S2)

従属節
主節



c. 来月北海道へ行くとき、船で行きます。 (S1=S2) (= 10a1)

従属節
主節



(24a-c)の文は全て「とき」節を含み、主節と従属節に非過去形が含まれる点では全く同じ状況であるが、図で示したように 3 種類の時の関係を示している。他の条件は同じであるが、時の関係に関して異なる様相を呈しているのである。

以上、教師としては特に中・上級のクラスを担当する場合、いくつかの理由により個々の従属節における主節と従属節の時の関係が異なることを理解した上で文の分

析や解釈を試み、学習者への対応を考えなければならないことを主張したい。

注

(1) 過去時、現在時、未来時の他に真理を表す超時があるが、本稿の議論とは直接かかわらないので、除外する。

(2) この他、主語「の」や内容節の説明を入れている教科書も少数ある。

(3) (10b1)は主節が以来の文型、「～てください」であるが、時の解釈としては未来時と解釈する。

(4) (11b)の文は傾向・習慣を表すので、時の指定に関しては完全に現在時を指定することはできない。話者が現在、真であると主張する文であり、本稿で扱っている時間関係からは逸脱する例であるが、少なくとも二つの時の関係は同時ではあることには変わりない。

参考文献

草薙裕（1981）「日本語のテンス、アスペクトの解析のアルゴリズム」、『文藝言語研究. 言語篇』、pp.69-83、筑波大学文藝・言語学系

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 (第 2 巻)』くろしお出版

益岡隆志、田窪行則（1992）　『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版

三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版

Soga, Matsuo (1983) Tense and Aspect in Modern Colloquial Japanese, UBC Press

【日本語教科書】

海外技術者研修協会（1992）『新日本語の基礎Ⅰ 文法解説書 英語版』スリーエーネットワーク

海外技術者研修協会（1992）『新日本語の基礎Ⅱ 文法解説書 英語版』スリーエーネットワーク

鎌田修、他（1998）『中級から上級への日本語 (Authentic Japanese: Progressing from Intermediate to Advanced)』ジャパンタイムズ

国際基督教大学（1996）Japanese for College Students: Basic 1, 講談社

国際基督教大学（1996）Japanese for College Students: Basic 2, 講談社

国際基督教大学（2000）Japanese for College Students: Basic 3, 講談社

国際日本語普及協会（2006）Japanese for Busy People [Revised 3rd Edition] I Kana Version,

講談社インターナショナル

国際日本語普及協会（2007）Japanese for Busy People [Revised 3rd Edition] Ⅱ Kana Version, 講談社インターナショナル

土岐哲、他（2001）『日本語中級 J501―中級から上級へ 英語版』スリーエーネットワーク

名柄迪（1992）Japanese for Everyone－教師用指導書、学研

西口光一（2000）『基礎日本語文法教本』、アルク

坂野永理、他（2011）GENKI: An Integrated Course in Elementary Japanese I [Second Edition] 初級日本語 げんき I [第 2 版], ジャパンタイムズ

坂野永理、他（2011）GENKI: An Integrated Course in Elementary Japanese II [Second Edition] 初級日本語 げんき II [第 2 版], ジャパンタイムズ

Nagara Susumu (1990) Japanese for Everyone: A Functional Approach to Daily Communications, Gakken

Yasu-Hiko Tohsaku (1994) Yookoso! An Invitation to Contemporary Japanese, Mcgraw-Hill College

(okawa@kansaigaidai.ac.jp)